

「生徒と教員の信頼関係なくして、結果は出ない」
こう語る榎並紳吉校長は、
生徒の力を伸ばすとともに、
教員の力を高める取り組みを進めている。

文●富田朗子 写真●釣巻 崇



「生徒に愛される価値のある学校にする。これが私の使命だと思っています」と語る榎並紳吉校長

さまざまに試みを次々に実践
生徒と教員を伸ばす学校改革
校成学園中学校・高等学校
榎並紳吉校長

SCHOOL DATA

学校名 校成学園中学校・高等学校
開校 1954年
校長 榎並紳吉
設置コース ■特進コース(難関国立)
■進学コース(国公立・私立)
※いずれも高校2年より、文系・理系がある
所在地 東京都杉並区和田2-6-29
電話 03-3381-7227
URL http://www.kosei.ac.jp/kosei_danshi/

人間教育を 大切に 中高一貫の男子校

東京・杉並区和田。都心でありながらゆったりとした雰囲気をもつこの街に、佼成学園中学校・高等学校がある。

同校は、1954年に創立された中高一貫の男子校だ。創立者は、立正佼成会の開祖であり、世界的な平和運動家としても知られる庭野日敬氏。建学の

精神として、「平和な社会の繁栄に役立つ若者の育成」を掲げている。

校訓は「行学二道」。「行」とは人間性、「学」とは学問を指し、その2つをともに高める教育を行なっている。

中高6年間を通じて、大学入試を見据えたカリキュラムづくりをしている進学校だが、人間教育にも重点を置いている。

とくに平和教育に力を入れており、総合学習や学校行事のなかに「平和」というテーマを意識的に取り入れている。

ノーベル平和賞の選考委員や戦場カメラマンなどを招いた文化講演会を開催するほか、世界の貧しい国の子どもたちに文具や毛布を贈るなど、ボランティア活動も行なっている。

こうした取り組みの集大成となるのが、高校2年時の修学旅行。戦争について事前学習を行なったうえで沖繩を訪ね、戦争の記憶を刻む史跡に足を運んでいる。

まさに「行学二道」の精神にのっとった教育を行なっている佼成学園だが、人間性と学力のさらなる向上を図るため、学校改革に取り組んでいる。その中

心となって改革を進めているのが、今年4月から校長に就任した榎並紳吉校長だ。

学力向上のため 学内の自習環境を 充実

学校改革のひとつ目の柱は、自習環境の充実だ。

まず、図書館と自習室の開放時間を延長し、夜8時まで自由に使用できるようにした。教員だけでなく、卒業生も監督として自習室に入っており、生徒は分からないことがあればいつでも質問をすることができる。

「学力を向上するためには、家庭学習が非常に大切です。しかし、生徒の環境もさまざまで、自宅ではスペースが確保できなかったり、集中できなかったりする場合がある。そこで、学校内で「自習の時間」を確保できるように環境を作ることにしたのです」（榎並校長）

さらに、パソコンを活用した自習環境も整備している。中学生を対象に、単元別の自習をすることができるようソフトを導入。パソコンの画面上で講義を受け、要点を確認したり、問題集

を解いたりすることもできる。授業に遅れている生徒には、補修・復習の手段として、先に進みたい生徒には、予習の手段として活用されているという。

また、高校生向けには、テレビ電話システムを導入。画面の向こう側にいる講師と双方向に書き込みをすることができ、「電子ノート」を活用し、1対1での個別授業が受けられる仕組みだ。

今春に開始したばかりだが、生徒の反響は大きい。榎並校長は「今後ますます活用されるのでは」と予測している。

『7つの習慣』導入で 初期教育の徹底を 図る

改革の2つ目の柱は、初期教育の徹底だ。

佼成学園中学校では、挨拶、授業態度、生活態度などの基本を身に付ける「躰教育」に重点を置いている。

それら「人間性の基礎となるもの」を、学校教育のなかで、体系的に学べるプログラムはないだろうか——そう考えていた榎並校長は、以前から『7つの



東京都杉並区にある佼成学園中学校・高等学校。辺りには緑が多く、都心とは思えないほど静かな環境だ



礼儀正しく素直な生徒が多く、外来者への気持ちよい挨拶には定評があるという

ました」

榎並校長は「これは絶対によいものだ」という確信をもっていましたが、その効果を測定するために、半年間のトライアル期間を設けることとなった。

06年10月、当時の中学1・2年生を対象に、『7日Jトライアル』の概要を伝えたところ、400人中130名の受講希望があった。

教員にとっては、生徒からそれだけの反応があっただけで十分なインパクトがあったが、トライアル中間のアンケートでさらに大きな驚きが広がった。9割以上の生徒が「受けてよかった」「自分がよい方向に変わっている」と評価したのである。

「7日Jを受講した生徒に『どうだ?』と声をかけたら、『すごく楽しく授業を受けています』という答えが返ってきたんです。ディスカッションやグループワークを通して、自分の意見を発表することや、仲間の話を耳を傾けることの楽しさを実感しているようです」

7日Jで取り組む課題の答えはひとつではない。自分で考え、自分で判断して「自分だけの答え」にたどり着く。このプロセス

スが授業を活発化させ、生徒の表情を明るくさせているようだ。

「また、7日Jの考え方には、本校の建学の精神にも通じるところがたくさんあるんです。たとえば、第4の習慣である『Win・Winを考える』。みんなで成功しようという精神は、平和教育の基本でもあります。みんなが、チームプレーで助け合おうという空気が生まれれば、学園生活はもちろん、のちの受験に向けてもよい効果を生み出すのではないかと思っております」

トライアル期間を経て、7日Jは道徳の時間に導入されることとなった。今年度より、中学1・2年生を対象に、週に1時間のペースで実施されている。

『よのなか科』で社会との関わりを知る

中学3年生では、進路学習として「よのなか科」の授業を開始した。

カリキュラムのヒントとなっているのは、同じ杉並区にある区立和田中学校の藤原和博校長が実践する「よのなか科」。経

習慣』に注目していた。

「いろいろと調べるうちに、生徒たちが向上していくための基礎、あらゆる活動に対するモチ

ベーションを高める基礎を身につける手段として、『7つの習

慣J（以下、7日J）が非常に有効であることが分かっ

済・政治・現代社会の諸問題を取り上げ、テーマに応じて外部からゲストを招き、生徒とともに世の中のしくみを考える授業だ。

昨年度、藤原校長の授業に倭成学園の教員が1年間通い、そのノウハウを吸収。和田中学校のテキストや資料も参考にしながら、倭成学園オリジナルの要素を入れた授業を展開する。

榎並校長は、「よのなか科」の授業を通じて、生徒に自分自身の未来に目を向け、目標をもってほしい、と考えている。

「中学生のうちに人間性の基礎づくりや目標設定をして、高校で学問に集中するためのベースを整えておくことが望ましい」と考えています。鉄は熱いうちに打て、という言葉があります。学校教育も初期段階が大切なのではないのでしょうか」

また、全6学年を対象に、今年度から作文教育も開始した。榎並校長は、国語力の向上は、他の科目の学力向上にもつながると考えており、これもまた「基礎固め」を徹底する試みのひとつといえる。

ファシリテーター 研修は 教員も伸ばす プログラム

学校改革の3つ目の柱は、生徒ではなく、教員にフォーカス



したものだ。

「企業の宝が社員であるように、学校の宝は教員です。生徒に対する改革も行なっています。それを実現するためには、まず教員を伸ばさなければなりません。わが校には、もともと面倒見のよい教員が多いのですが、

それに甘んじることなく、さらにレベルアップを図っていかうと考えています」

榎並校長は、コミュニケーション能力に長けた教員を養成したいと考えている。そのひとつ目の手段として、「コーチング」を導入した。



各教科とも授業時間数を充実。中学校では、英国数が公立校の約2倍の授業時間数となっている

学校内に迎えたスクールコーチとの対話を通じて、コミュニケーションについての理解を深めながら、そのスキルを体得することが目的だ。

また、学習塾の早稲田アカデミーが主催する「教師力養成塾」にも、多くの教員が参加。

1回3時間の授業を10日間にわたって受講するカリキュラムだが、そのなかにもコミュニケーションに関する講義が含まれているという。

さらに、7HJ導入により、教員を対象に、進行係としての役割を担うファシリテーター（※1 以下FT）を育成する研修も行なわれることになった。

生徒を指導するための研修だが、教師本人の成長を促すためにも有効に活用されている。

「FT研修から帰ってくると、教員が見違えるほど成長しているのが分かります。生徒のためにやるぞ！ というモチベーションが高まり、労力を惜しまない姿勢が強くなります」

さらに、FT研修にはフォローアップがあるため、教員のモチベーションが低下しないことが魅力だという。

「フォローアップで受けた刺激は、すぐに授業で活かすことができます。そこで『自分の授業が生徒たちに響いている』という手ごたえをつかむことができれば、またそれが教員の刺激になる。FT研修によって、よい

※1 ファシリテーター：7つの習慣の授業を担当する進行係。参加者の心の動きや状況を見ながら実際にプログラムを進行していく人のことを指し、参加者自身の気づきを促すことを目指す。



図書館、自習室は夜8時まで開放時間を延長。集中できる環境で学ぶことができる

授業が生まれる循環ができています」

佼成学園の7日Jは、クラス単位で行なわれている。メインの指導はF Tが担当するが、クラス担任もフォロワー役として参加する。

「F T研修を受けていない教員も、F Tとチームを組んで授業を行なうことで刺激を受けています。7日Jは、生徒だけでなく、教員も伸ばすことができるプログラムですね」

信頼関係から「結果」が生まれる

榎並校長がここまで改革に力を入れ、コミュニケーションを重視するのはなぜなのか。その理由は、榎並校長のルーツにあった。

「私はこの学校の卒業生です。高校1年生のときに『この学校の先生になりたい』と決意して、大学卒業後に教員となって戻ってきました」

学生として、教師として、40年近くの年月を過ごしてきた母校、佼成学園への熱い想い。そういったなかで、感じるのは「信頼関係を築くことの重要性」だった。

「生徒と教員がうまくいかない」と、結果が出ない。これはハッキリしています。そして、生徒と教員が意思疎通を図り、信頼関係が確立されれば、生徒たちは学校が好きになるし、勉強も好きになる。おのずと成績が伸びるから、進学実績にも結びついてくる。これは、私の経験から得た確信です」

榎並校長自身も、生徒とのコミュニケーションを大切にしている。授業中は各クラスを巡り、休み時間は生徒に声をかける。放課後はクラブ活動を回り、休日は試合の応援に駆けつけた。



「生徒に『自分を応援してくれ人だ。味方なんだ』と認識されるようになれば、生徒は教師の授業を真剣に聞くようになります。だからコミュニケーションが大切なんだということを、私自身が実践しながら、教員に行動で示しているのです」

改革推進のため外部の力も活用

最後に、いくつもの取り組みを同時に行なう秘訣を聞いた。

「多くの教員は、すでにたくさん仕事を抱えています。それに加えて、新しいことを次々に押し付けられても、現実的にこなすことはできません。」

だから私は、外部に優れたものがあれば活用するようにしています。外部の力を借りることに抵抗がある学校もあります。が、改革を進めるために必要なことであればやるべきです」

着実な実行が結果につながっている。

「先日、図書館で自習をしている生徒に声をかけたら、『最近、学校の雰囲気がよくなってきたよね、つてみんなで言い合ってるんですよ』という話をしてくれたんです。生徒の言葉は励みになりますね」

笑顔で語る榎並校長の表情には、自信があふれていた。すでに改革の手ごたえを感じているようだ。

「生きる力を育む7つの習慣J」

「7つの習慣」は、世界36カ国で1500万部以上の売り上げを記録するビジネス書。日本でも1996年に発売され100万部を突破するベストセラーとなっている。アメリカでは、この内容の研修が、政府や軍、1500社以上の大手企業で社員教育として導入されている。これを日本の小中高校生向けにしたのが「7つの習慣J」。夢があふれる未来を自分の力で切り拓ける力を身に付ける教育プログラムとなっている。

- 第1の習慣 自分が選択する
- 第2の習慣 終わりを考えてから始める
- 第3の習慣 一番大切なことを優先する
- 第4の習慣 Win-Winを考える
- 第5の習慣 まず相手を理解してから次に理解される
- 第6の習慣 相乗効果を発揮する
- 第7の習慣 自分を磨く

「7つの習慣®」および「7つの習慣J™」は、米国フランクリン・コヴィー社の登録商標および商標です。